

◆ 研究概要

1990年に北京留学に赴いて以来、中国映画に研究テーマを絞り、1930年代日中戦争前夜の左翼映画創作に関する研究、1980年代における中国映画の“リアリティ”に関する考察、1950～60年代という中国社会国家建設時代の“喜劇”映画に関する研究などを行ってきました。2008年、本学着任以降は、中国語学を講じる傍ら、中国映画を用いた語学教材運用に関する試みや、中国伝統文化再解釈、中国人の慣習に関する考察など広汎な研究活動を展開、中国文化論講義に活かしています。中国映画史再解釈の研究を厭くことなく継続しつつ、現在関心を向けているのは、中国人の日本観、日本人の中国観に見える“ズレ”の現象であり、それを“1980年代”という時代的メルクマールで捉えられないだろうか、と考えている最中です。

■ 研究テーマなど

1. 中国歴代映画芸術に関する再考察

現代中国映画は、中華民国時代に勃興した左翼映画文化運動に端を発して今の時代まで足跡を残してきました。その史的叙述に在る記録は往々にして社会主義進歩史観に偏向し、映画作品そのものの潜在的価値観を抹消してしまいがちです。現在目に出来る映像を実際に「読む」＝仔細に分析することを通して正当な価値を発見し、それを再度時代軸に載せ直すことにより、作品の歴史的存在意義を見出していく作業を続けています。時に意外な場面や台詞が、その作品の神髄を示していることを発見し、えも言えぬ興奮に打ち震えたりします。映画制作期の時空を追体験する、貴重な瞬間です。



”

教養基礎教育部門
中国語・中国文化講義担当
准教授

よしなみ あきら

好並 晶

a.yoshinami@socio.kindai.ac.jp



<http://researchmap.jp/AkiraYoshinami/>

2. ことばはライブ感で。中国語教育私見

世界中で英単語を最も多く学んでいるのが日本人と言われます。が、私自身も含め、えてして日本人は西洋各国の人々を前に英語を口にするのが苦手。日本人の慎ましやかな気質、と言えば聞こえはいいですが、それでは異文化交流は実現できません。“爆買い”という流行語が示す通り、いま中国から来た観光客が日本中を闊歩しています。彼らを前に中国語を口にできるか……その第一歩を踏み出すための語学授業を目下展開しています。キーワードは“ライブ感”。テキストを自在に操縦し、生の中国語感覚を学生諸君と共有する、そんな“Fun to drive”な語学の時間を組み立てていこうと、日々刻苦奮闘しています。



3. お団子頭は中国娘？日本人の中国観

パンダが可愛い、料理が美味しい……中国に対する良いイメージを学生に訊ねればこのような答えが。負のイメージはPM2.5、マナー問題や貧富差など具体的な例が限りなく出てきます。が、私たちは中国への認識を何処かで押し止めていますか？中国文化論講義ではこの点に注目し、中国伝統文化や風習を多く例示して我々の「勘違い」を是正し、広範に亘る中国観を獲得できるよう問い掛けています。例えば、中国の女の子を絵に描くと、頭にお団子が二つ、なぜ付いているの？

● 論文・評論・著書など

○ 論文 (近作のみ)

1. 中国映画にみる“文革”叙述の意義—『青春祭』『サンザシの樹の下で』を例に—
『研究中国』通巻122号第2号 p. 35-50 2016年4月
2. “自尽”という名のメロドラマ—中国映画『一江春水向东流』再繙—
『近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）』第5巻第2号 p. 31-53 2014年11月
3. 「人倫」への優しき眼差し—中国映画『唐山大地震』を観る—
『関西大学中国文学会紀要』第33号 p. 1-18 2012年3月

○ 授業報告・評論 (近作のみ)

1. 異文化と「勘違い」—いま、中国を講ずることについて
『近畿大学総合社会学部紀要』第4巻第2号 p. 83-93 2016年3月
2. “Let it go”をどう訳す？—歌詞翻訳に見るお国事情
『中国文芸研究会会報』第400期記念号 p. 34-37 2015年3月
3. 収束点へと拡散する思考—『侯孝賢の詩学と時間のプリズム』書評
『中国21』第39号 p. 207-213 2014年1月

○ 著書 (共著)

1. 「鏡合わせの中国人と日本人—中国映画に投影される日中両国—」
『中国・台湾における日本像』第一章 東方書店 2011年3月
2. 「毛沢東時代映画に対するアレルギーの消失—「記憶」と「記録」—」
『新中国の60年—毛沢東から胡錦濤までの連続と不連続—』第10章
日本現代中国学会 創土社 2009年9月

○ 学位取得論文

『人民中国「喜劇」映画の研究』関西大学 博士（文学）2004年9月

▲ 趣味

- ・旧車いじり：現在2002年型SUBARU LEGACY (BH5D)をMTで乗っています。エコカー何する者ぞ。
- ・旧式カメラいじり：銀塩カメラが泣いている。独逸の名玉“ULTRON”を復活すべし！
- ・80年代アニメーション鑑賞：作画がダメでもテーマがいい。何より創作への気合が充分。

4. 1980年代日本に対する眼差し

私は1980年に中学生となり、インベーダーゲームや松田聖子、YMOのシンセサイズな旋律の中を過ごしました。あるSFアニメの中では「1984年が、人々にとって一番幸せな時だった」とヒロインが語ります。奇しくもそれは村上春樹が自作『1Q84』に設定した時代と同じ。今、“失われた20年”の中で育ってきた世代たる学生たちに、1980年代とは何か？を語る必要があるのではないのでしょうか。先進国アメリカに憧れ模倣し、それを基に独自の文化表象を構築していった80年代日本への眼差しを、最近熱くしているところです。